

伝説の実況放送「前畑ガンバレ！」 紀の川が生子、そして鍛えた 日本人女性初の金メダリスト

「前畑ガンバレ！ガンバレ！ガンバレ！」。1936年8月11日深夜。ベルリンオリンピック競泳女子200m平泳ぎで、前畑秀子（結婚後は兵藤）がデッドヒートを繰り広げる。その姿を伝える男性アナウンサーの実況中継に、日本中の人々が固唾を飲む。そしてゴール。日本中で湧き上がる歓声。日本人女性初の金メダリストが誕生した瞬間だった。

前畑は、世界遺産・高野山の麓橋本町（現在の橋本市）の豆腐屋を営む両親の長女として生まれた。生家の真裏に流れる雄大な紀の川は、前畑と共に出場した小島一枝、メルボルンオリンピック（1956年）の金メダリスト古川勝を初めとする多くの

オリンピック選手を育んできた。前畑は3歳のころから両親の背中に乗って水泳を覚え、中学1年生になると、100m平泳ぎの日本女子新記録を更新。体育教育に力を入れる椋山高等女学校（現、椋山女学園 名古屋市中区）に編入することとなる。

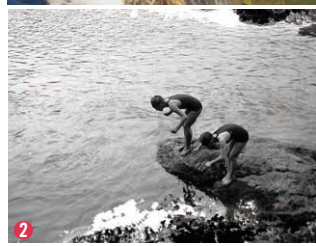
そして両親の相次ぐ死去という悲しみを乗り越えて臨んだ1932年のロサンゼルスオリンピック。女子200m平泳ぎでは、わずか0.1秒という差で2位となり、念願の銀メダルを獲得した。しかし、国民は強く金メダルを熱望したことから、「やり始めたことは、最後まで」という生前の母の言葉に従い、ベルリンオリンピックに向けて1日2万mを泳ぐ猛練習

を続けることを決意した。ベルリンオリンピックに決死の覚悟で挑む

「優勝できなかったら、帰りの船から飛び込んで死ぬしかない」。そんな決死の思いで臨んだベルリンオリンピック。前畑ガンバレ！と23回連呼されたアナウンサーの実況とともに金メダルを獲得。表彰台で涙する22歳の前畑の目には、悠々と流れる紀の川の「天然プール」の姿が浮かぶ。それは前畑が通っていた小学校の先生たちが川底に杭を打ち、コースロープを張って造ってくれた即席のプールだった。「紀の川があったおかげで、（中略）水泳選手になれた」と著

書「前畑ガンバレ」の中でも綴られている。その後引退した前畑は、小さな子供を持つ母親向けの水泳教室を開くなど、積極的に水泳の普及や後進の指導にも力を注いだ。

母校の橋本市立橋本小学校を訪ねると、そこには誇らしげに前畑たちの写真が飾られ、「地元の偉人の功績を子供たちにも語り継いでいきたい」と小林孝光校長は話す。また水泳一筋に生きた前畑の物語をNHK朝の連続ドラマ小説に、という活動も進められている。市民らでつくる「前畑秀子朝ドラ誘致実行委員会」の鈴木江利夫事務局長は、「2020年の東京オリンピックを前にぜひ実現させたい」と意気込んでいる。（本文中敬称略）



①前畑たちを育てた紀の川。力強い川の流れが水泳の練習にむいているのだろうか。②紀の川に飛び込もうとする前畑（左）。③生家があった辺り。国道24号線沿いに民家や商店が並ぶ。④橋本市郷土資料館には、当時ののぼりや国内大会のメダルなど、ゆかりの品々が大切に保管されている。⑤ラジオで前畑の優勝が伝えられると、通りや駅前には大勢の人が繰り出し、相賀八幡神社まで提灯行列が行われた。



⑥ベルリンオリンピックの後、橋本市の写真館で撮影された1枚。⑦国民を熱狂させた「前畑ガンバレ！」の実況放送は、ポリドール・レコードからSP盤レコードとして発売された。記録ものとしては、異例の大ヒットとなった。前畑自身、生涯大切に持ち、折あるごとに何度も聴き直したという。当時は、前畑を題材にした浪曲のレコードまで発売された。⑧ロサンゼルスオリンピックの銀メダルの健闘をたたえ、椋山高等女学校の校長が建立した母、光枝の碑。地元墓地に建つ。

④⑥⑦橋本市郷土資料館蔵 ①橋本市まちの歴史資料保存会提供